

2014年10月26日 礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書 19章 28～40節

説教：それをほどいて連れて来なさい

1 旧約預言の成就

イエスはエルサレムの町に近づいたとき、このようなことを言います。「向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が見つからないので、あるのに気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。」そう言ってから、ふたりの弟子を使いに出します。

なぜわざわざこのようなことをするのでしょうか。旧約聖書を子どもの時から学んでいるユダヤ人たちは、イエスがしようとしていることを見て、ゼカリヤ書 9章 9節を思い出しました。「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。」

これを見ると、イエスは旧約聖書に書かれているとおりの手順を踏んで、ご自分が救い主であることを示そうとした。そのためにわざわざろばの子を連れて来させた。ゼカリヤ書を見ればすべてが説明ができます。これで問題は解決！と、言いたいところですが、そんな単純な話なのでしょうか。もっと深い意味はないのか。そのことをこれから考えます。

2 イエス

1) 繰り返されることば

30節から34節のみことばをもう一度読みます。ここで繰り返し使われている言葉がありますので、そこに注意してください。「むこうの村に行きなさい。そこに入ると、まだ

誰も乗ったことのない、ろばの子が見つからないので、あるのに気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。もし、『なぜ、ほどくのですか』と尋ねる人があったら、こう言いなさい。『主がお入り用なのです。』」使いに出されたふたりが言って見ると、イエスが話されたとおりであった。彼らがろばの子をほどいていると、その持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか」と彼らに言った。弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。」

どのことばが繰り返されているか気がついたでしょうか。いくつかありますが、ここでは二つ挙げたいと思います。一つは「ほどく」ということば。もう一つは「主がお入り用なのです。」

繰り返されていることばにどうして注目するか。みなさんは、他の人に大切なことを伝えたいとき、どんなふうにしますか。書かれたものであれば、赤い文字にするとか、太い文字にするでしょう。文字の大きさや色を自由に変えられないときは、同じことばを何度も繰り返して、大切なことを伝えようとするでしょう。聖書も同じです。同じことばが繰り返されているなら、何かを強調していると考えるのが自然です。では、「ほどく」と「主がお入り用なのです」を繰り返すことで、いったい何を強調したいのでしょうか。

2) ほどく

まず「ほどく」を見ましょう。ここでは何度も繰り返されていますから、これはもう何かあると考えるべきです。他の箇所では、死

の苦しみから解き放つ、悪いものから自由に
するという意味で使われています。イエスは
今エルサレムに入ろうとされています。十字
架は、もうすぐ目の前に迫っています。十字
架に関係のないことをしている暇はもうあ
りません。これだけ繰り返して「ほどく」と
いうことばを使うのなら、このことばは、十
字架につながっていると考えるべきです。ろ
ばの子をほどく。それは、罪につながれてい
る私たちを、死の苦しみから解き放つ。その
ことを暗示しています。

3) 「主がお入り用なのです」

次に、「主がお入り用なのです」を見ます。
ふたりの弟子は、言われたとおりに道ばたに
つながれていたろばの子をほどいて連れて
行こうとします。不思議なことに、イエスは、
持ち主に断ってからろばの子をほどきなさい
とは言っていません。断りもなくほどくの
ですから、そばにいた持ち主が不審に思って
質問するのは当然でしょう。イエスは、きち
んとあらかじめ答えを用意しています。「主
がお入り用なのです」と答えなさい。

イエスのことばはいつも巧妙です。何が
お入り用なのか、あえて言っていません。「言
わなくてもわかる。ろばの子に決まってい
る。」確かにそうでしょう。でも先ほど見た
ように、ろばの子をほどくことは、死の苦し
みから私たちを解き放つ、そんなふうにつな
がっているとしたらどうでしょう。こういう
ことではないですか。「主がお入り用な
のです。」何が お入り用なのか。罪から報酬である死につな
がれている私たちをほどく、死から解き放つこと、そのことは主にとってどう
しても必要なことである。

こんなことを言うと、それは考えすぎでは

ないかと言われるかもしれません。ではどう
してイエスは、わざわざろばの子をあえて持
ち出してきたのでしょうか。ゼカリヤ書にあっ
た預言を成就するため。ただそれだけですか。
では、このあと何か起きたのですか。そのこ
とを見て考えましょう。

3 もしこの人たちが黙れば

1) 自分たちが見たすべての力あるわざのこ とで

イエスがろばの子に乗ってエルサレムに
入るとき、人々は自分たちの上着を道に敷い
ています。これは、王を迎えるときの最大限
の歓迎の仕方なのだとされています。その
時の様子が37節にあります。「弟子たちの群
れはみな、自分たちの見たすべての力あるわ
ざのことで、喜んで大声に神を讚美し始め
た。」

弟子たちが大声で神を讚美したのは、すべ
ての力あるわざを見たからだ、とあります。
確かに彼らは見てきました。イエスによって
盲人の目は開かれ、障害を持った人がいやさ
れ、死人もよみがえりました。それだけでは
ありません。ゼカリヤが預言したとおりに、
今イエスはろばの子に乗っているのを自分
たちの目で見ています。弟子たちは確信しま
した。この方はイスラエルの救い主となって、
自分たちが願ってきた政治的な野望を必ず
成し遂げる。それで大喜びでますます神を讚
美します。

2) 十字架に追いやられるイエス

いっぼうでこのことを喜んでいない人た
ちがいました。イエスを憎み、殺そうと思っ
ていたパリサイ派の人たちです。イエスがろ
ばの子に乗り、まるで王様気取りでエルサレ

ムに入ってくるのをどうしても許すことができません。とうとう我慢がなくなり、パリサイ人のあるひとりがこう言います。「先生。お弟子たちをしかってください。」文字で読めばおだやかな表現に見えますが、心の中ではこう思っています。「弟子たちを黙らせろ。そうしないというのなら、おまえを殺す。それでもいいのか。」ひとこと言えば脅迫です。

イエスは次のように答えます。40節。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」仮にこの人たちが黙らせたとしても、石が叫び出すだろう。だから、黙らせるのは無駄ですよ。そんな意味です。もちろん誇張した表現ですから、実際に石が叫ぶというのではないでしょう。イエスは、弟子たちが大声で神を讃美していることを絶対に止めないと言いたいのです。

皆さんはこれをどのように考えますか。私たちは神を讃美することが良いことであると教えられています。なので、神を讃美している弟子たちのことを、イエスが止めようとしたくないのは当然である。そう考えるかもしれません。でもその結果どうなるのでしょうか。パリサイ人はイエスを憎んでいます。弟子たちが大声で叫べば叫ぶほど、パリサイ人たちのイエスを殺したいという思いはますます強くなっていくのではないですか。

ということは弟子たちは何をしたことになるのか。彼らは気がついていませんが、神を大声で讃美するということで、イエスを十字架に追いやっていったことになります。イエスは、それを見ながら止めようとはしません。いや、そんな消極的なことではありません。わざわざろばの子を連れて来させ、ろばの子に乗るというパフォーマンスをしました。も

しこれが、目立たないようにしてエルサレムに入ったなら、パリサイ人たちにここまで憎まれることはなかったでしょう。ところが、イエスはゼカリヤの預言を思い出させるためにろばの子を連れて来させます。それを見た弟子たちが大喜びで神を讃美するようになります。どう見てもイエスは、パリサイ人の怒りとねたみの炎に油を注ぎ、燃えさかるようにけしたてているとしか言いようがありません。ご自分が十字架に追いやられていく、そのスピードを上げるために、アクセルをますます強く踏み込んでいるようなのです。

イエスがどうして、ろばの子を持ちだしてきたのか。ご自分を十字架に追いやるためにでした。

3) ぶどうの血で

イエスはろばの子に乗って十字架に向かわれます。もしろばの子が私たちのことを指しているというのであれば、イエスは、私たちの背中にかつかれ、十字架に向かわれたことになります。私たちは、神である方を十字架に連れて行ったことになります。主は私たちを叱りつけたりはしません。むしろ、あなたの背中に乗りたい、あなたの手でつかれていきたいと言われます。「あなたのためにそうするのだ」とは言いません。「わたしにはそうすることが必要なのです」と、まるでご自分の責任であるかのような言い方をされるのです。

イエスはどのようにして私たちを罪から救ってくださったのか。最後に創世記49章11節を開きます。「彼はそのろばをぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を、良いぶどうの木につなぐ。彼はその着物を、ぶどう酒で

洗い、その衣をぶどうの血で洗う。」

私たちは、罪という木につながれ、そこで苦しんでいました。けれどもこの方は、私たちをほどいてくださり、今はイエスと呼ばれる良いぶどうの木につながれております。そのことをなさるために、この方は真っ赤な血を流されます。そのことが主にとって必要なことだから。だからそうするのだ。主はそのように語って下さいました。